



旧5月5日の節句が過ぎ、夏至も過ぎました。節句にはショウブをあげたりショウブ湯に入ったり、……。ちなみに、「節句に『とろろ』を食べるとよい」という言い伝えがある地域もあるとか……。

自分達で考え行動する

運動会が終わって「ホッと一息」と言う間もなく駆け抜けた6月。子ども達の検診、見学、そして、先生たちの出張や会議も加わって何もない日はありません。お客さまも毎日どなたかがいらっしやいます。「運動会までは」と入れてこなかった行事が立て続けですし、昨年度は中止になった学校外の行事などもコロナを見ながら少しずつ行われるように努力されているからのようです。

そんな中、子ども達の学習も、さまざまに展開されてきました。

2年生活科探検

「どっち?」「あっち?」「あっちだー!」と大騒ぎしながら2年生が進んでいきます。先生は後ろ。子ども達が、絵地図を見ながら自分達で考えます。引率者の打ち合わせでは

- ・なるべく子ども達に任せる
- ・少々迷ってもOK(時間には余裕があります)
- ・ただし、危ないなど「あんまり」な場合は先生が助ける



ということを話し合いました。時には迷ったりしても、そこが勉強のチャンス。どこまでできるか、やらせてみました。

3年社会科町探検

3年生は、社会科の学習での見学です。通りに何があるか、詳しく調べます。「海の方」、「東海寺の方」とコースを分担しての探検です。よく見てこないとあとでみんなに報告しなければなりませんから、責任重大です。3年生は、2年生の時に、生活科でも自分達で探検をしています。



こんな風に子ども達が、自分達で考えて行動することを増やしていきます。そのような経験が、5年生になれば「野外キャンプ」につながります。昨年は、初めての土地で地図を見ながら「ウォークラリー」を行いました。例年であれば、火を起こしたりご飯を炊いたりもします。みんなで泊まります。そんなときも、どこまで自分達でできるかやらせてみたいです。うまくいってもつまずいても、大きな勉強になります。だから、わざわざ学校外に出かけて行って、わざわざ不自由を体験します。6年生になれば、今度は、修学旅行です。昨年度は、コロナでできませんでしたが、知らない街を自分達で地図と時刻表をもって、バスや電車を乗り継いで見学することを計画していました。

そんなことにつながっていく、それぞれの学年段階での学習です。子ども達は急にはできるようにはなりません。少しずつ意識して学習を組んでいきます。これは、急には大人になれなくて、少しずつ大人に育てていくことにも似ています。

「単元開発」と呼んでいます

先生たちも「自分達で」

2年生や3年生だけでなく、いろいろな学年で校外に出かけての見学学習が行われています。社会科や理科や海洋科“ひろの学”など。これらは、教科書にある内容の通りではなく、むしろ教科書にないオリジナルの教材であることが多いです。

学校や家の周りには、ほかの地区の学校では勉強できない題材がたくさんあります。それらを取り込んで何時間かの授業に組み立てられないかと考えます。何時間かの授業のまとまりを「単元(たんげん)」と言っていますが、自分達で教科書にない単元をつくるのですから、『**単元開発**』と呼んでいます。

昨年までの授業を参考にしたりアレンジしたり、地域の方から情報を得て新しくひらめいたり、……。そこからは、先生方が実際に見学しに行ったり、そこでまた説明して下さる方を紹介していただいたり、……。そうやって、先生達も地域の方とのつながりに助けをいただいて単元(授業)をつくっていきます。



ウニの増殖溝や栽培漁業センターの見学も種市でなければ勉強できません(5年生)。



町農林課の方や丸大県北農林さんから林業のことを教わったり見学をさせていただいたりしました(5年生)。

朝、たくさんの空き箱をもって登校してくる子がいました。

チョコレートの空き箱からティッシュの箱まで。何の箱を持って来たかだけでも教室で一盛り上がりできそうなくらいたくさんです。何をするのかかと思っていると……。



1年生の教室に、たくさんの図工作品が並びました。



4年生は防潮堤の見学をしました。



6年生は、7月に入ると、「うに」と「**持続可能な**」水産業・地域づくりについて学ぶために、見学学習に出かけるそうです。

1学期も残りが少なくなるなかですが、各学年の学習が進められています。

また、ある日の朝、今度は高学年の子が大きな箱を持って登校してきました。「**学級で議題箱を作ることになったので持ってきました。**」とのこと。

もうすぐ7月、1学期のまとめの時期です。生活を振り返って「**こんなことを直していきたい**」とか「**まとめにこんな取り組みをしよう**」というような議題がたくさん集まっていくことでしょう。そんな議題箱を作るのに役立つと大きな箱を持って通ってきた姿を微笑ましく感じたのでした。